

親の期待によるマルトリートメントに関わるインタビュー調査

私立中高一貫校受験をめぐる

○橋本浩子（近畿大学大学院総合文化研究科）・小泉隆平（近畿大学総合社会学部）

キーワード：マルトリートメント、親の期待、私立中高一貫校、PAC 分析

目的

一般に虐待は「家庭の経済的危機」や「社会的孤立」が背景にあると説明されることが多い。しかし、「家庭の経済的危機」や「社会的孤立」を背景とせず一見問題がないと見える親による虐待の存在を友田（2017）は「マルトリートメント（不適切な養育）」、古荘（2015）は「教育虐待」の語を用いて、貧困を背景とせず、一見問題がないと見える親による「虐待」の存在を論じている。内田（2014）はそのような「虐待」の背景に「親の期待」があると指摘している。親が子に寄せる期待は本来子どもの成長に寄与するものであるはずだが、内田（2014）は「無言の圧力により子どもたちを締めつけおしつぶそうとし、精神的にストレスフルな状況に追い込んでいく、ネガティブな側面」を「操作的期待」とし、さらに「小学校高学年から中学生という時期は、勉強・進路が重要なテーマとなる時期であり、親としては勉強・進路に対して特別な思い（親のコンプレックスや上昇志向など）を持って関わることになり、そこには親の操作性が入り込む可能性が高くなる」と指摘している。

本研究では、「親の期待」が最も明確に示される機会と考えられる子どもの中学受験を経験した母親へのインタビューを実施、分析することで、親の期待における「操作性」を明らかにし、「家庭の経済的危機」や「社会的孤立」を背景としないマルトリートメントの中でも教育虐待につながる危険性を明らかにすることを目的とした。

方法

私立中高一貫校を受験した子どもの母親7名（子どもが現在大学生、大学既卒生の母親で自身も私立中高一貫校を受験し合格した）にインタビューを実施した。子どもの私立中高一貫校受験への母親の思いや、合否結果による子どもと母親の思いの変化を中心にインタビューし、PAC（Personal Attitude Construct《個人別態度構造》）分析を用いて検討した。PAC分析は内藤（1997）により「個人別に態度構造を測定するため」に開発された。内藤（1997）は「当該テーマに関する自由連想（アクセス）、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法である。」としている。

近畿大学総合社会学部倫理規定に従って研究を行った。また、本研究によって社会的差別、経済的損害を研究者が受けたり、対象者に与える恐れはない。

結果

「私は中学受験をして私立中高一貫校で過ごしたことにより良い人生を得たという価値観があるので子どもにも迷いなく受験をさせようと思った。」子どもは合格後の学校生活も「よい友人に恵まれ楽しく過ごした」と語られたように、子どもの「中学受験」を語る際に自身の「中学受験」やその後の学校生活についての語りが繰り返され、どの研究協力者にとっても中学受験は強い成功体験になっていた。

さらに、父親も同様の経歴を持っていると子どもの「中学受験」は夫婦の中でより強い規定路線となっていたが、父親が他の経歴を持つ場合、「中学受験で成功すれば幸せになる」という一元的な価値観は夫婦で共有されなかった。時として価値観の違いは言動で示され、ある父親は「中学受験しなくても、高校大学で受験すればいい。」と子どもに語った。また別の父親は、受験のストレスで子どもに強い身体症状の出ても中学受験を諦めきれない母親と子どもに対して、中学受験をしないよう強い行動に出たことがその例である。また一人親などの場合は母親自身の思いがより強く子どもに影響し、「地元の小学校では子どもの存在感が埋もれていた。存在感を示してほしい。」「中学受験は私の気持ちを押し付けた最後の機会」などと語られた。

母親が自らの中学受験とその後の人生を「成功体験」と捉え、子どもに同じように中学受験を経験することで「良い人生」を送らせようとする強い「操作性」を持つ期待として働くことが示された。

考察

母親が、「中学受験」を強い成功体験として認識し、幸福な人生の絶対条件として子どもがそれを踏襲することを強く期待する場合、母親は中学受験で不合格になったり、そもそも中学受験ができないという状況をイメージできず、大きな不安感を持つ。そして、その不安は「絶対合格してほしい」という強い「操作的期待」となって子どもにのしかかる。この強い期待は母親が自覚する場合と無自覚な場合があるが、いずれも操作性が見られた。

本研究では、期待に対して子どもが親に反抗する、あるいはチックなど身体症状を示すなどの不適応のケースも見られた。そのような場合、親の不適切な介入、また子ども自身の持つ脆弱性により、問題が深刻化する危険性があると考えられる。親の期待によるマルトリートメントは深刻な結果につながる恐れがあり、場合によっては「虐待」につながると考える。今後、自身が中学受験を経験していない母親についても調査を進めたい。

(HASHIMOTO Hiroko, KOIZUMI Ryuhei)